





## 病害虫発生予察情報予報第3号(7月の予報)




佐賀県農業技術防除センター



6月1日～8月31日の3か月間は農薬危害防止運動期間です。  
農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理を徹底しましょう。

### I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 <sup>注1)</sup>	7月の予想発生量 <sup>注2)</sup> 平年比	予報対象の病害虫 (抜粋)
水稲 (早期)	穂いもち	並	 斑点米カメムシ類
	紋枯病	並	
	斑点米カメムシ類	多	
	<b>1. 斑点米カメムシ類</b> 本年は、雑草地での発生が平年より多い。水稲の出穂10日前までに、水田周辺の畦畔、休耕田、空き地等の除草を実施するとともに、穂揃い期及び乳熟期(穂揃い期の約10日後)の2回防除を行う(令和8年6月22日付け病害虫発生予察注意報第2号参照)。		
水稲 (山間早植え)	葉いもち	やや多	 葉いもちの進展型病斑
水稲 (普通期)	葉いもち	やや多	
	<b>1. いもち病</b> 放置された残り苗は伝染源となるため、速やかに除去し処分する。本田で新たな病斑の発生が認められたら、早急に防除を行う。 <b>2. スクミリンゴガイ</b> 一部圃場で食害を認めており、今後の降雨等の状況次第で被害が拡大するおそれがある。浅水管理や薬剤防除、用排水路での貝及び卵塊の捕殺等を組み合わせた総合的な防除対策を地域ぐるみで徹底する。防除対策の詳細は、令和8年5月26日付病害虫対策資料第5号、「スクミリンゴガイ防除対策マニュアル(移植水稲)(農水省HP)」並びに「スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)防除対策マニュアル(佐賀県HP)」を参照する。		
水稲 (山間早植え・普通期)	トビイロウンカ	並	 トビイロウンカ
	セジロウンカ	並	
	コブノメイガ	並	
	<b>1. 海外飛来性害虫(ウンカ類、コブノメイガ)</b> 今後の飛来状況や発生予測については、当センターが発表する最新の情報を参考に、各地域で発生状況を確認する。例年より早い6月上旬に誘殺されているため、山間早植え水稲では、特に今後の発生状況に注意する。多飛来した場合や新世代成虫の密度が高い場合には、その次世代幼虫のふ化揃い期に防除を行う。		

作物名	病虫害名 <sup>注1)</sup>	7月の予想発生量 <sup>注2)</sup> 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
イチゴ	うどんこ病	やや少	 炭疽病
	苗立枯症 (炭疽病・疫病・萎黄病)	やや多	
	ハダニ類	多	
	アブラムシ類	多	
	<b>1. 苗立枯症（炭疽病、疫病、萎黄病）</b> 炭疽病については、定期的な薬剤防除を行い、特に強風前や台風の襲来が予想される場合は、予防防除を徹底する。立枯性病害が発生した株は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。 <b>2. ハダニ類</b> 本圃への持ち込みを防ぐため、育苗期の防除を徹底する。薬剤防除には、薬剤抵抗性の発達の可能性が低いとされる気門封鎖系薬剤を活用する。ただし、これらの薬剤は卵に対して効果が無いものが多いので、5～7日間隔での2回散布を1セットとし、発生状況に応じて数セット散布する。		
アスパラガス	茎枯病	やや少	 ミカンキイロアザミウマ
	褐斑病	やや少	
	斑点病	やや少	
	アザミウマ類	多	
	ハダニ類	並	
<b>1. アザミウマ類</b> 一部地域で、ミカンキイロアザミウマの発生が確認されている。発生種によって薬剤の感受性が異なるので、効果を確認しながら薬剤の選定を行う。虫見板への払い落とし等により、発生状況を確認し早期防除に努める。 <b>2. 茎枯病、褐斑病、斑点病</b> 晴天時には施設開口部を開放し、通風を図る。各病害とも予防散布を基本とし、発生前から3週間間隔を目安として薬剤防除を実施する。降雨が続く場合や、前年多発生圃場及び既発生圃場では、散布間隔を短縮する。茎枯病については、降雨時にサイドビニルを降ろし、雨の降込みを防ぐとともに、発病茎は見つけ次第、除去し適切に処分する。			
施設果菜類	<b>1. アザミウマ類、コナジラミ類</b> 施設内に残ったアザミウマ類やコナジラミ類の野外への拡散を防ぐため、栽培終了時に施設の密閉処理（蒸し込み）を必ず行い、これらの害虫を死滅させる。なお、次作の定植までの期間が短い場合であっても、日中の高温を確保できるよう適切な密閉期間を設ける（令和8年5月28日付け病虫害対策資料第6号参照）。		

作物名	病虫害名 <sup>注1)</sup>	7月の予想発生量 <sup>注2)</sup> 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
果樹全般	果樹カメムシ類	多	 チャバネアオカメムシ
	<b>1. 果樹カメムシ類</b> 本年のチャバネアオカメムシの平均越冬虫数は平年より多いため、7月までの本虫の発生量は平年より多いと予想される。なお、飛来状況は地域によって異なるため圃場をよく観察し、飛来を確認したら早急に防除を行う（令和8年3月25日付け病虫害発生予察注意報第4号、令和8年5月12日付け病虫害対策資料第4号参照）。		
カンキツ	そうか病	やや多	 カンキツかいよう病
	かいよう病	並	
	黒点病	並	
	ミカンハダニ	並	
	チャノキイロアザミウマ	やや多	
	<b>1. かいよう病</b> 台風の襲来等強風雨が予想される場合や、本病が発生しやすい園および幼木園では、襲来7日前～前日までに必ず薬剤を散布する。また、発病した枝や葉は伝染源となるため、除去し園外に持ち出して処分する。ただし、強剪定を行うと枝を遅くまで伸長させ、本病にかかりやすい期間を長くするため、強剪定は行わない。 <b>2. チャノキイロアザミウマ</b> 本年は発生がやや多いと予想されるため、7月中旬頃の薬剤散布を徹底する。 <b>3. カネタタキ</b> 近年、本虫の発生が増えて被害が発生しているため、発生動向に注意し、被害の発生初期に薬剤を散布する。		
ナシ	黒星病	やや少	 カンザワハダニ
	ナシヒメシンクイ	やや多	
	ハダニ類	やや多	
	<b>1. ハダニ類</b> 施設栽培などの一部圃場で多発している。園内をよく観察し、低密度からの防除を徹底する。特に、園周縁部などスピードスプレーヤーによる散布で薬液がかかりにくい部分では、手散布を実施するなどして防除の徹底を図る。 <b>2. 夜蛾類</b> 近年被害が増えており、本年も被害を受ける可能性が高いと考えられる。対策として忌避灯の点灯状況を必ず確認したうえ、本種を誘引する被害果及び腐敗果を園外に持ち出して処分する。 <b>3. 黒星病</b> 6月下旬～7月上旬は主要な感染時期であるため、DMI剤を用いた防除を必ず実施する。発生園、常発園または雨が続く場合には、DMI剤を追加散布する。		

作物名	病虫害名 <sup>注1)</sup>	7月の予想発生量 <sup>注2)</sup> 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
ブドウ	黒とう病	やや少	 ブドウべと病
	べと病	並	
	褐斑病	並	
	チャノキイロアザミウマ	やや多	
	<b>1. べと病</b> 降雨により感染が進展するため、降雨前の予防散布を徹底する。また、べと病の罹病葉・果実は伝染源となるので必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する。		
<b>2. チャノキイロアザミウマ</b> シャインマスカットは、巨峰と比較して本虫の加害を受けやすい。そのため、シャインマスカット植栽園では、園内全樹（他品種を含む）を対象に袋掛け後も2～3回程度、薬剤を散布する。			
茶	炭疽病	やや多	 チャノホソガ幼虫
	輪斑病	並	
	カンザワハダニ	多	
	クワシロカイガラムシ	並	
	チャノキイロアザミウマ	やや多	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	
	チャノコカクモンハマキ	並	
	チャノホソガ	多	
<b>1. 炭疽病</b> 新芽開葉初期が防除適期となるので、この時期に薬剤散布を実施する。三番茶を摘採する園及び枝条更新園では確実に防除を行う。予防剤（開葉初期）＋治療剤（2～3葉期）による防除が効果的である。			
<b>2. カンザワハダニ</b> 多発生すると防除が困難となる。生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。			
<b>3. チャノキイロアザミウマ</b> 萌芽期～開葉初期に防除を行い、多発生園では、さらに一週間後を目安に追加防除を行う。			
<b>4. チャノホソガ</b> 幼虫が葉裏に潜行する新葉展開期のうち、発蛾最盛期から1週間後が防除適期である。ただし、脱皮阻害剤の防除適期は発蛾最盛期である。新芽に薬剤が十分かかるように散布する。			

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病虫害総合防除計画」も参照してください。

病虫害総合防除計画掲載アドレス

[https://www.pref.saga.lg.jp/ki\\_ji003101844/index.html](https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji003101844/index.html)

二次元コード→



## II. 予報の内容・根拠等について

### 予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去10年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。  
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

### 予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。  
○発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

### 防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「佐賀県病害虫総合防除計画」をご参照ください（4ページの注釈にリンクが有ります）。

### 写真

- 1～4ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。

### 7月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する7月の気象条件については、福岡管区気象台発表の1ヶ月予報（令和8年6月18日）を基に、「気温：平年並」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1ヶ月予報における7月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	30	30 (27.2℃)	40	並
降水量	30	30 (366.8 mm)	40	並

### Ⅲ. 7月の予報

## 水稲（早期、上場地域）

[【概要に戻る】](#)

定期調査：12 圃場  
調査日：6月16日

### 1. 穂いもち

#### 1) 予報の内容

発生量：平年並

#### 2) 予報の根拠

##### (1) 発生の現況

###### ① 定期調査（図1参照）

葉いもち発生株率0%（平年1.5%、前年0.7%）

平年比：やや少（-～±）

##### (2) 7月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件（±）

#### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉いもちの発生が認められている圃場では、穂ばらみ期に穂いもちの防除を行う。

(2) 葉いもちの発生が上位葉に見られるなど穂いもちの多発生が予想される場合には、穂揃い期にも防除を行う。

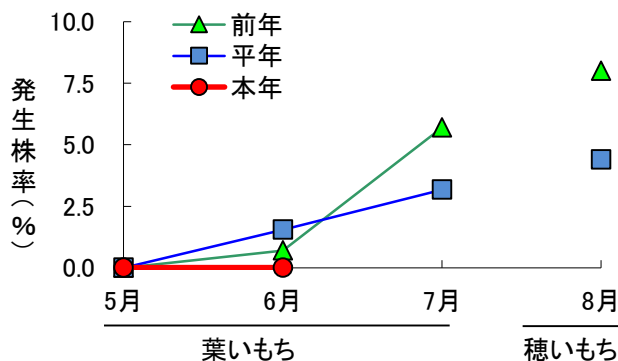


図1 早期水稲でのいもち病の発生推移

### 2. 紋枯病

#### 1) 予報の内容

発生量：平年並

#### 2) 予報の根拠

##### (1) 発生の現況

###### ① 定期調査（図1参照）

発生株率0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±）

##### (2) 7月の気象予報

気温及び降水量は並で、並発生の条件（±）

#### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 早期水稲の出穂期～登熟期は気温が高い時期であり、本病が進展しやすいので、出穂の20～10日前（粒剤の場合は30～20日前）を中心に防除する。

(2) 薬剤は株元に十分かかるように散布する。

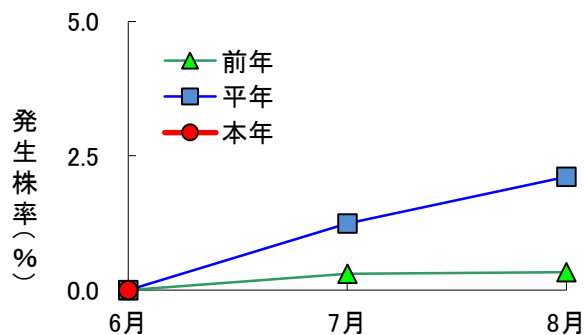


図1 早期水稲での紋枯病の発生推移

### 3. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホカメムシ、アサジカメムシ、ミナミアカメムシ等）

#### 1) 予報の内容

発生量：平年より多い

#### 2) 予報の根拠

##### (1) イネ科雑草での捕虫網によるすくい取り調査（6月15日～18日）

発生量は種により異なるが、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、ミナミアオカメムシで発生が平年より多い（表1）。〈+〉

表1 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果

20回すくい取り虫数(令和8年6月15日~18日)

調査地点	場所	草種	クモヘリカメムシ		ネリハリカメムシ		シラホシカメムシ類		アサシカシカメ		ミナミアオカメムシ	イネカメムシ	
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	成虫	幼虫
唐津市①	道端	イタリアンライグラス	0	0	0	5	0	0	88	0	2	0	0
唐津市②	空地	イタリアンライグラス	90	6	6	0	0	1	4	0	0	0	0
唐津市③	空地	イタリアンライグラス	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0
唐津市④	空地	イタリアンライグラス	7	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0
玄海町	空地	イタリアンライグラス	29	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0
多久市	空地	イタリアンライグラス	0	0	0	0	0	4	138	52	118	0	0
伊万里市①	空地	イタリアンライグラス	0	0	3	5	0	0	74	11	17	0	0
伊万里市②	空地	イタリアンライグラス	82	0	11	0	1	1	21	0	0	0	0
伊万里市③	空地	イタリアンライグラス	549	1	12	7	0	0	173	1	0	1	0
鳥栖市	道端	イタリアンライグラス	0	0	0	0	0	0	8	2	3	0	0
神埼市	空地	エノコログサ類	52	0	0	0	1	0	6	9	1	0	0
上峰町	道端	イタリアンライグラス	74	0	11	0	0	0	14	3	10	0	0
嬉野市	空地	エノコログサ類	249	0	2	2	0	0	3	1	1	0	0
鹿島市①	空地	メヒシバ	5	0	2	0	0	0	5	1	0	0	0
鹿島市②	道端	メヒシバ	0	0	0	0	0	0	131	7	0	0	0
白石町①	空地	エノコログサ類	87	0	1	0	0	0	7	0	0	0	0
白石町②	空地	エノコログサ類	2	0	0	0	0	0	19	2	2	0	0
平均(本年)			72.1	0.4	2.9	1.1	0.1	0.4	41.2	5.2	9.2	0.1	0.0
平年(過去10年の平均)			1.6	0.1	1.1	0.1	0.5	0.1	27.1	8.2	0.05	0.01	0.00
平年比			多	多	多	多	やや少	多	やや多	並	多	並	並
前年			0.4	0.0	1.7	0.0	0.1	0.0	13.4	1.2	0	0.0	0.0

(2) 7月の気象予報

気温は並で、並発生の条件(±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 水稻の出穂10日前までに、畦畔を含めて除草を行う。
- (2) 穂揃い期と乳熟期(穂揃い期の約10日後)の2回、薬剤防除を行う。
- (3) イネカメムシは水稻の出穂始めに糞を吸汁して不稔被害を生じさせるなど、他の斑点米カメムシ類とは異なる特徴がある。そのため、圃場内をよく観察し、本種の早期発見に努めるとともに、出穂前に本種の発生を認めた圃場では、通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期~乳熟期の防除だけでなく、出穂期の薬剤散布を実施する。

水稻(山間早植え)

[【概要に戻る】](#)

定期調査: 12圃場  
調査日: 6月15日

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査(図1参照)

発生株率0%(平年0%、前年0%)  
平年比: 並(±)

(2) 葉いもち感染好適条件出現状況【県内、隣接県計10地点】

BLASTAMIにおいて、感染好適条件および準感染好適条件が6月2日、9日、23日に広範囲に出現した(表1)。(±~+)

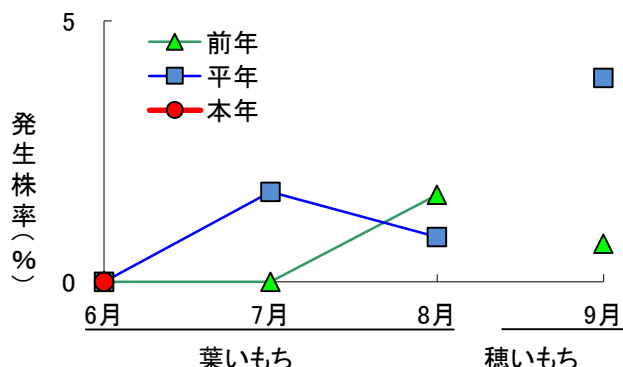


図1 山間早植え水稻でのいもち病の発生推移

(3) 7月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉いもちの進展型病斑（予報の概要の写真参照）が確認された場合には、早急に本田防除を実施する。
- (2) 今後のBLASTAMIによる感染好適条件の出現に注意し、圃場における発生状況を確認する（佐賀県農業技術防除センターのホームページを参照）。

表1 BLASTAMIによる葉いもち感染好適条件の出現状況(令和8年)

月	日	佐賀					福岡			長崎	
		唐津	伊万里	佐賀	嬉野	白石	前原	太宰府	久留米	松浦	佐世保
6月	1日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	2日	●	●	—	●	●	—	—	—	—	●
	3日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	4日	—	—	—	—	—	●	—	—	—	—
	5日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	6日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	7日	—	—	—	●	—	—	—	●	—	—
	8日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	9日	●	●	—	—	●	●	—	—	●	●
	10日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	11日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	12日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	13日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	14日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	15日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	16日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	17日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	18日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	19日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	20日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	21日	—	●	—	—	—	—	2	2	—	—
	22日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	23日	●	4	—	—	●	●	●	●	●	—

- 1: 準好適条件(湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が20℃未満)
- 2: 準好適条件(湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が25℃以上)
- 3: 準好適条件(湿潤時間は10時間以上であるが、湿潤期間中の平均気温が15～25℃の範囲外)
- 4: 準好適条件(湿潤時間が湿潤期間中の平均気温ごとに必要な時間数より短い)
- : 好適条件(湿潤時間が長く気温も適当で、葉いもちの感染好適条件が出現した)
- : 好適条件の出現なし
- ?: 判定不能

BLASTAMIの活用方法

- (1) BLASTAMIは、気象条件(アメダスデータ)のみによって葉いもちの発生を予測するシステムである。しかしながら、実際の圃場における葉いもちの発生には、気象条件の外にも、菌の多少(密度)、イネ品種による抵抗性や体質、薬剤防除条件などが大きく関与している。したがって、BLASTAMIは、あくまでも葉いもち発生予察の参考資料の一つとして扱う。
- (2) BLASTAMIは、葉いもちを対象としており、稲の移植約20日後を起点とした35日間(6月15日移植の場合、7月5日～8月10日)が適用期間とされている。ただし箱施薬が行われた圃場では、その持続期間中はBLASTAMIは使用できない。
- (3) 葉いもちは、菌の侵入から発病までの潜伏期間が約1週間である。そのため、BLASTAMIによる感染(準感染)好適条件が現れた場合、感染株では約1週間後から初発生あるいは病斑数の急激な増加が予想できる。
- (4) BLASTAMIによる感染(準感染)好適条件の出現回数が多いと、その地域の葉いもちの発生面積が増加し、発病程度も著しくなることが予想できる。

## 水稲（普通期）

[【概要に戻る】](#)

定期調査：48 圃場（うち 32 圃場は未移植）  
調査日：6月15日～17日

### 1. 葉いもち

#### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

#### 2) 予報の根拠

##### (1) 発生の現況

###### ① 定期調査（図1参照）

発生株率1.0%（平年0.3%、前年0%）

平年比：やや多〈±～+〉

##### (2) 7月の気象予報

気温は並で、並発生の条件〈±〉

#### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 放置された残り苗は伝染源となるため、速やかに除去し処分する。
- (2) 本田で新たな病斑の発生が認められたら、早急に防除を行う。

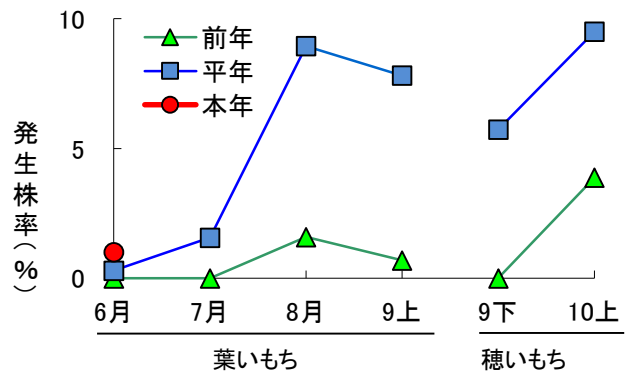


図1 普通期水稲でのいもち病の発生推移

## 水稲（早植え、普通期）

[【概要に戻る】](#)

### 1. トビイロウンカ

#### 1) 予報の内容

発生量：平年並

#### 2) 予報の根拠

(1) 6月3～6日頃と6月17～20日頃に、県内のライトトラップで誘殺を認めている（共通一表1）。〈±〉

#### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 今後の飛来状況や発生予測については、当センターが発表する最新の情報を参考に、各地域で発生状況を確認する。
- (2) 例年より早い6月上旬に誘殺されているため、山間早植え水稲では、特に今後の発生状況に注意する。
- (3) 多飛来した場合や新世代成虫の密度が高い場合（普通期水稲および早植え水稲において、7月下旬～8月上旬に10株当たり成虫および幼虫が2頭以上）には、その次世代幼虫のふ化揃い期に防除を行う。

### 2. セジロウンカ

#### 1) 予報の内容

発生量：平年並

#### 2) 予報の根拠

(1) 5月26～28日頃、6月4～6日頃、6月15日～20日頃に、県内のライトトラップで誘殺を認めている（共通一表1）。〈±〉

#### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 早生・中生品種で1株当たり成虫が5頭以上、晩生品種（ヒヨクモチ等）で1株当たり成虫が10頭以上寄生していた場合は、飛来成虫あるいはその次世代ふ化幼虫を対象とした防除を行う。
- (2) 今後の飛来状況等については、当センターが発表する最新の情報を確認するとともに、各地域で発生状況を確認する。その他については特記事項を参照する。

### 3. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 6月18～21日頃に、県内のライトトラップへの誘殺を認めている（共通一表1）。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、多飛来した場合や新世代成虫の密度が高い場合には、飛来あるいは発蛾最盛期の1週間後に防除を行う。

(2) 今後の飛来状況等については、当センターが発表する最新の情報を確認するとともに、各地域で発生状況を確認する。

共通一表1 イネウカ類・コブノメイガのトラップ捕獲状況(2026年)

月	日	トビイロウカ				セジロウカ				コブノメイガ						
		佐賀県		長崎県		佐賀県		長崎県		佐賀県					長崎県	
		佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	佐賀市	佐賀市	神埼市	伊万里市	白石町	武雄市	諫早市
ネットトラップ	ライトトラップ <sup>°</sup>	ライトトラップ <sup>°</sup>	ネットトラップ	ネットトラップ	ライトトラップ <sup>°</sup>	ライトトラップ <sup>°</sup>	ネットトラップ	フェロモントラップA <sup>°</sup>	フェロモントラップB <sup>°</sup>	粘着トラップ(20W蛍光灯)	フェロモントラップ	フェロモントラップ	粘着トラップ(20W蛍光灯)	フェロモントラップ		
5月	22日	0	0	0		0	0	0								
	23日	0	0	0	0	0	0	0							0	
	24日	0	0	0	0	0	1	0								
	25日	0	0	0		0	0	0								
	26日	0	0	0		0	1	0								
	27日	0	0	0		0	20	1								
	28日	0	0	0	0	0	1	0							0	
	29日	0	0	0		0	0	0	1							
	30日	0	0	0		0	0	0			0			0		
	31日	0	0	0		0	0	0	0							
6月	1日	0	0	0	0	0	0	0	0						0	
	2日	0	欠測	0	0	0	欠測	0	0					0	0	
	3日	欠測	1	0	0	欠測	0	0	0					0	0	
	4日	0	0	0	0	0	17	0	1						0	
	5日	0	0	0	0	0	0	0	1						1	
	6日	0	1	0	0	0	1	1	0			0			0	
	7日	0	0	0	0	0	0	0	0						0	
	8日	0	0	0	0	0	0	0	0						0	
	9日	0	0	0	0	0	0	0	0	0				0	0	
	10日	0	0	0	0	0	0	0	0						1	
	11日	0	0	0	0	0	0	0	0						0	
	12日	0	0	0	0	0	0	0	0						1	
	13日	0	0	0	0	0	0	0	0			0			0	
	14日	0	0	0	0	0	0	0	0						1	
	15日	0	0	0	0	0	1	0	0						0	
	16日	0	0	0	0	0	1	0	0	0				0	0	
	17日	0	1	0	0	0	1	0	0						0	
	18日	0	4	0	0	0	4	0	0						6	
	19日	0	0		0	0	1		1					5	44	
	20日		8		0		4		0						8	
	21日		0		0		0		1							
	22日		0				1									

注1)ウカ類：佐賀市のネットトラップは、農業試験研究センターで調査(回収日で集計)。嬉野ライトトラップ(予察灯)は農業技術防除センターで調査。6月1～2日の嬉野ライトトラップは、装置の不具合により欠測。

注2)コブノメイガ：神埼市、白石町、伊万里市、武雄市は防除員が調査。佐賀市のフェロモントラップは農業試験研究センターで調査。  
※長崎県のデータは、長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室提供。

# イチゴ（育苗圃）

[【概要に戻る】](#)

定期調査9圃場

調査日：6月15～17日

## 1. 苗立枯症（炭疽病・疫病・萎黄病）

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ①定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年0.01%、前年0%）

平年比：並（±）

②現地の一部圃場で炭疽病の発生が確認されている。（±～+）

#### (2) 7月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件（±）

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 炭疽病対策として、親株床から定期的な薬剤防除を徹底する。また、伝染抑制効果が高いビニル雨よけ下での育苗を行う。
- (2) 台風の強風雨により急激に発病が増える恐れがあるため、長雨や台風襲来が予想される場合には、必ず予防散布を行う。
- (3) その日の天候やポットの乾き具合を考慮して灌水を実施する、ポット間隔を十分にとり通風を図る等、高湿度条件が長時間続かないよう注意する。
- (4) 立枯性病害が発生した株は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。

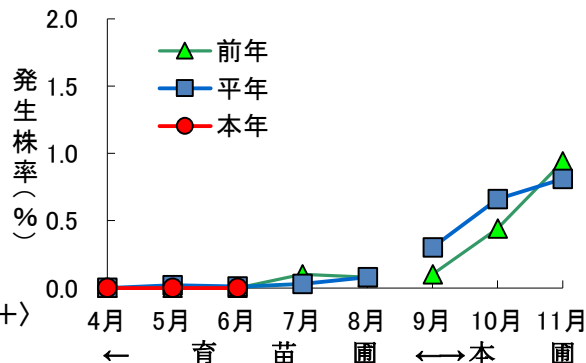


図1 イチゴ立枯症の発生推移

## 2. ハダニ類

### 1) 予報の内容

発生量：平年より多い

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ①定期調査（図1参照）

発生株率：19.1%（平年11.4%、前年2.8%）

平年比：多（+）

#### (2) 7月の気象予報

気温及び降水量は並で、並発生の条件（±）

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 薬剤防除には、薬剤抵抗性の発達の可能性が低いとされる気門封鎖系薬剤を活用する。ただし、これらの薬剤は卵に対して効果が無いものが多いので、5～7日間隔での2回散布を1セットとし、発生状況に応じて数セット散布する。

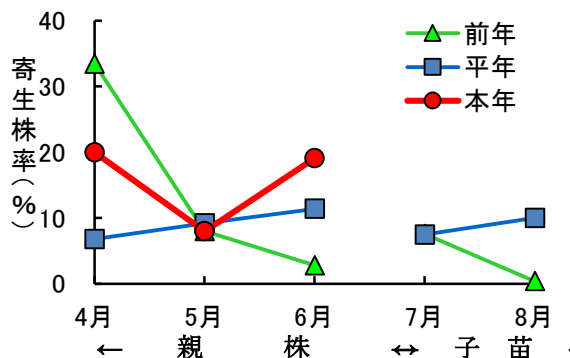


図1 ハダニ類のイチゴ育苗圃での発生推移

### 3. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：12.0%（平年2.0%、前年4.4%）

平年比：多（±）

(2) 7月の気象

気温及び降水量は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 早期発見、早期防除に努める。

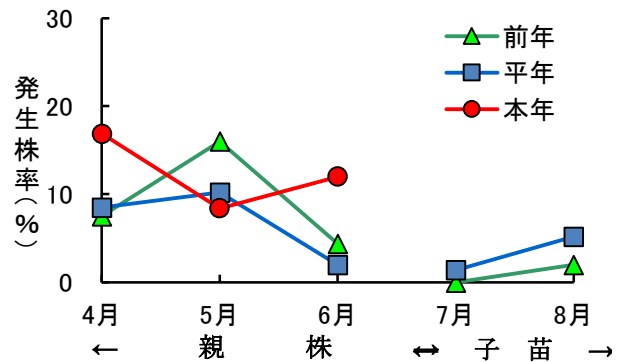


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

## アスパラガス

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8圃場

調査日：6月15日～17日

### 1. 茎枯病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生茎率：0%（平年0.1%、前年0%）

平年比：やや少（-～±）

(2) 7月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 晴天時には施設開口部を開放し、通風を図る。

(2) 予防散布を基本とし、発生前から3週間間隔を目安として薬剤防除を実施する。降雨が続く場合や、前年多発生圃場及び既発生圃場では、散布間隔を短縮する。

(3) 降雨時にサイドビニルを降ろし、雨の降込みを防ぐとともに、発病茎は見つけ次第、除去し適切に処分する。

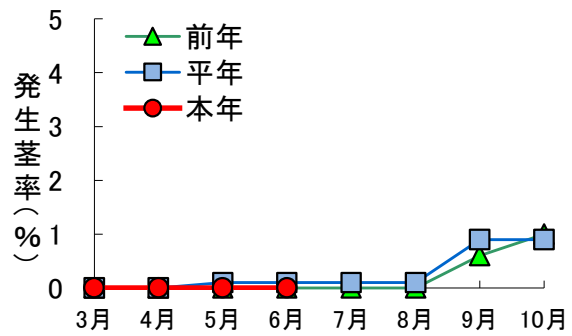


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

### 2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年1.1%、前年0%）

平年比：やや少（-～±）

(2) 7月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件（±）

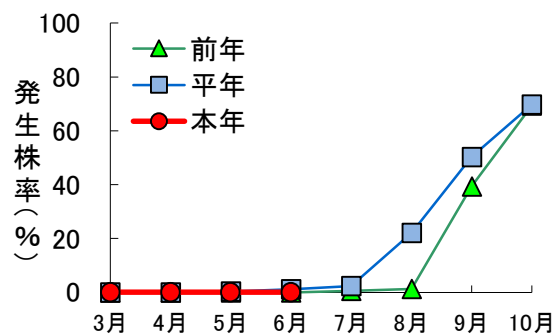


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 晴天時には施設開口部を開放し、通風を図る。
- (2) 予防散布を基本とし、発生前から3週間間隔を目安として薬剤防除を実施する。降雨が続く場合や、前年多発生圃場及び既発生圃場では、散布間隔を短縮する。

## 3. 斑点病

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0% (平年1.3%、前年0%)

平年比：やや少く(〜±)

#### (2) 7月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件(±)

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 晴天時には施設開口部を開放し、通風を図る。
- (2) 予防散布を基本とし、発生前から3週間間隔を目安として薬剤防除を実施する。降雨が続く場合や、前年多発生圃場及び既発生圃場では、散布間隔を短縮する。

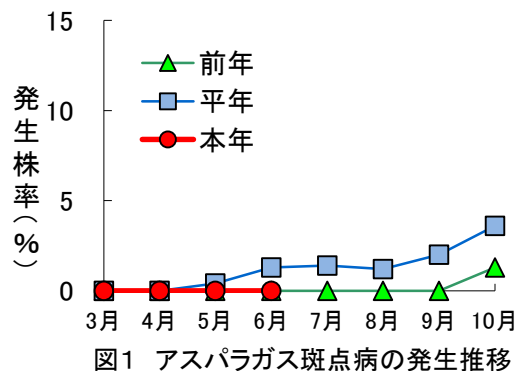


図1 アスパラガス斑点病の発生推移

## 4. アザミウマ類

### 1) 予報の内容

発生量：平年より多い

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：56.9% (平年40.6%、前年31.3%)

平年比：多く(+)

#### (2) 7月の気象予報

気温は並で、並発生の条件(±)

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 虫見板への払い落とし等により、発生状況を確認し早期防除に努める。

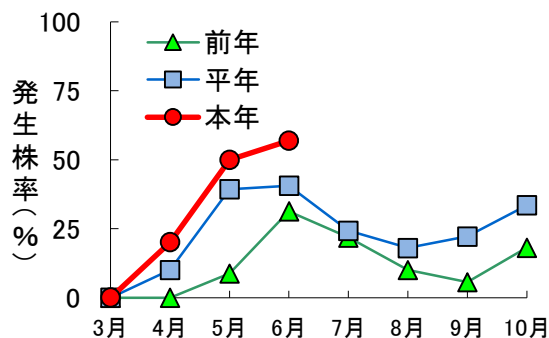


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

## 果樹全般

[【概要に戻る】](#)

## 1. カメムシ類

### 1) 予報の内容

発生量：平年より多い

### 2) 予報の根拠

#### (1) チャバネアオカメムシの越冬状況調査

① 越冬地点率：88.2% (平年44.1%、前年29.4%)

平年比：多く(+)

② 平年越冬虫数：2.51 頭/m<sup>2</sup> (平年0.32 頭/m<sup>2</sup>、前年0.14 頭/m<sup>2</sup>)

平年比：多く(+)

## (2) 発生の実況

### ① 予察灯 (図1 参照)

平年比: 多く(+)

### ② フェロモントラップ (図2 参照)

平年比: やや多(±~+)

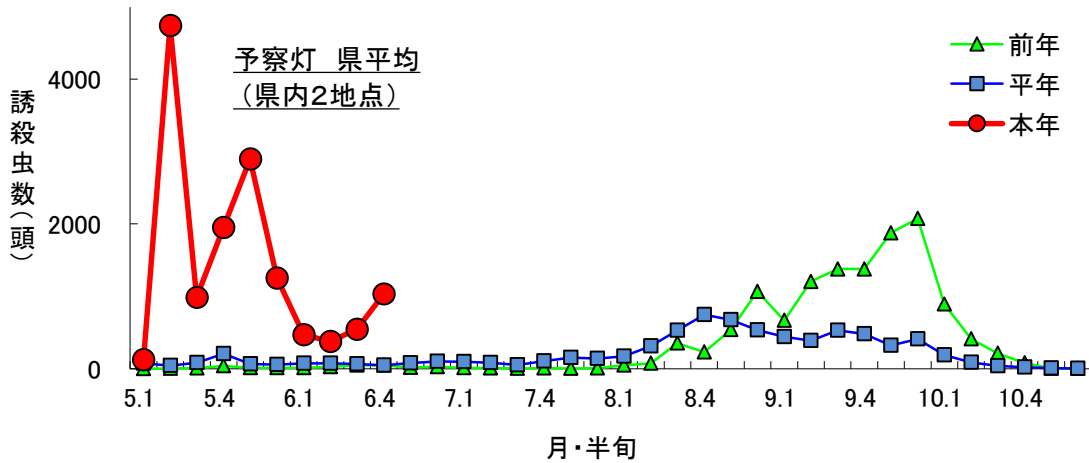


図1 予察灯 (佐賀市、小城市) による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

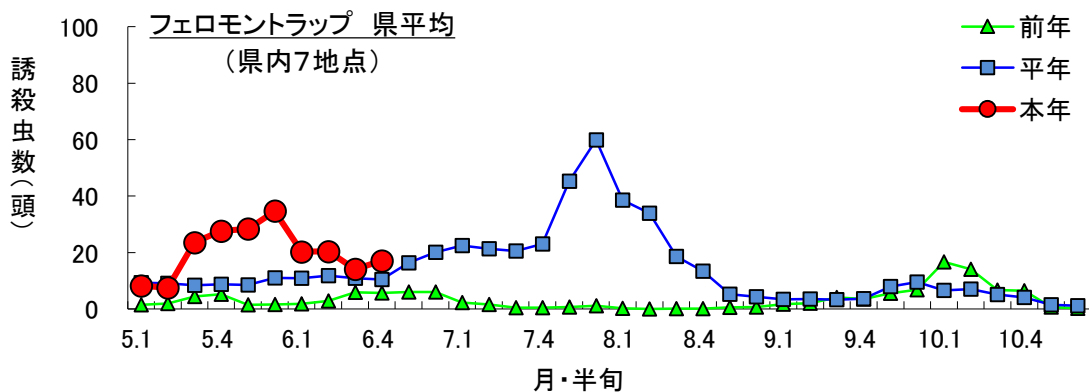


図2 フェロモントラップ (小城市、鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、唐津市鎮西町、基山町、太良町) による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

## 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本年のチャバネアオカメムシの平均越冬虫数は平年より多いため、7月までの本虫の発生量は平年より多いと予想される。なお、飛来状況は地域によって異なるため圃場をよく観察し、飛来を確認したら早急に薬剤を散布する (令和8年3月25日付け病害虫発生予察注意報第4号、令和8年5月12日付け病害虫対策資料第4号参照)。
- (2) 果樹カメムシ類は、樹高の高い樹に一旦飛来し、その後果樹園に飛来する傾向があるので、防風樹等は必要以上に高くならないよう剪定する。
- (3) 合成ピレスロイド剤等を散布するとハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖 (リサージェンス) を生じる場合があるので、これらの害虫の防除対策も併せて実施する。

# カンキツ

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8 圃場  
調査日：6 月 18～19 日

## 1. そうか病

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ①定期調査（図 1、2 参照）

発生葉率：0.1%（平年 0%、前年 0%）

平年比：多（+）

発生果率：0.1%（平年 0%、前年 0%）

平年比：多（±）

##### (2) 7 月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件（±）

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生が確認された園では、黒点病と同時防除を行う。

## 2. かいよう病

### 1) 予報の内容

発生量：平年並

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ①定期調査（図 1、2 参照）

発生葉率：0%（平年 0.02%、前年 0.1%）

平年比：並（±）

発生果率：0%（平年 0%、前年 0%）

平年比：並（±）

##### ②中晩柑での発生状況：

一部品種で発生が確認されている。（±～+）

#### (2) 7 月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件（±）

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 発病した枝や葉は伝染源となるため、除去し園外に持ち出して処分する。ただし、強剪定を行うと枝を遅くまで伸長させ、本病にかかりやすい期間を長くするため、強剪定は行わない。

(2) 前年に発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種（レモン、ネーブル、はるみ等）の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、無機銅剤水和剤（クレフノン 200 倍加用）を定期的に散布する。散布間隔の目安は 20～25 日とする。

(3) 台風の襲来等強風雨が予想される場合、本病が発生しやすい園及び幼木園では、襲来 7 日前～前日までに必ず薬剤を散布する。

(4) 無機銅水和剤にマンゼブ水和剤を混用すると、無機銅水和剤の防除効果が低下するため混用は控える。

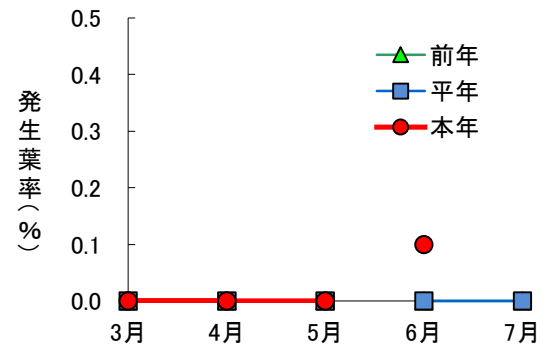


図1 カンキツそうか病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

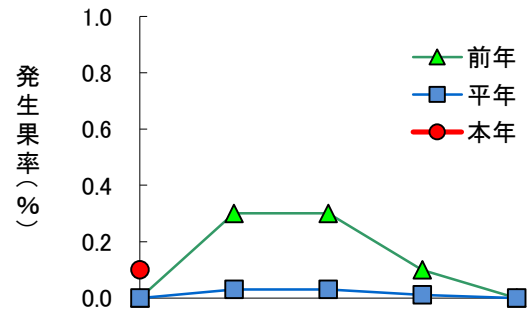


図2 カンキツそうか病（果実）の発生推移

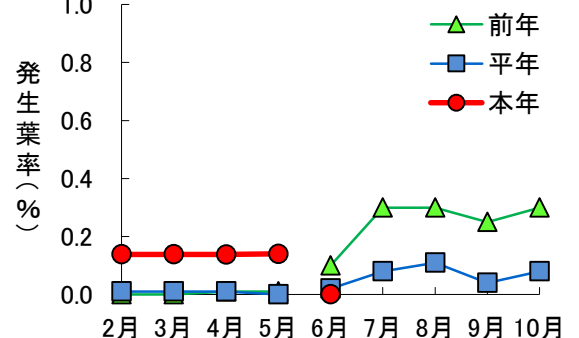


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

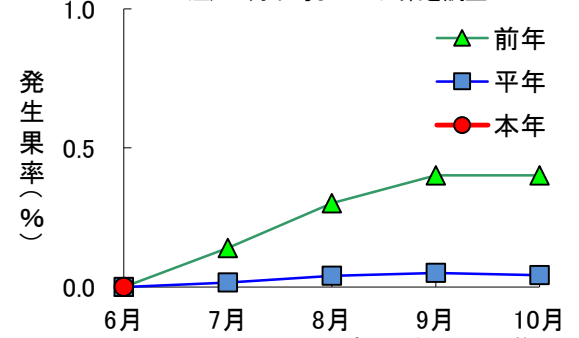


図2 カンキツかいよう病（果実）の発生推移

### 3. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生果率：0.3% (平年0.6%、前年0.1%)

平年比：並 (±)

(2) 7月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 枯れ枝や剪定枝は伝染源となるため除去し処分する。園内に残った切り株は抜根するか、ビニルの袋などで全体を覆って病原菌の胞子が飛散するのを防ぐ。

(2) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、積算降雨量が200~250mm (マシン油乳剤を6月に加用した場合は300~400mm) に達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次の薬剤散布を行う。

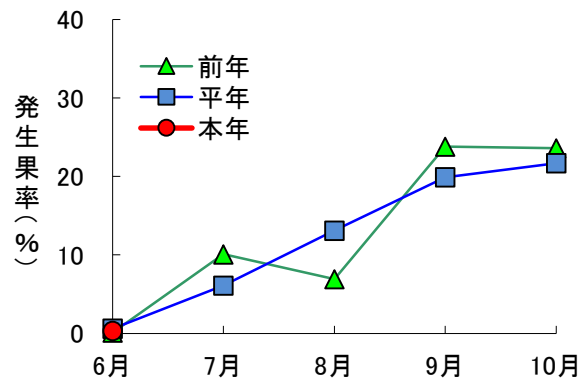


図1 カンキツ黒点病の発生推移

### 4. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率：3.4% (平年14.0%、前年1.8%)

平年比：やや少 (一)

(2) 7月の気象予報

気温及び降水量は並で、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 低密度時 (寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5~1頭) から、殺ダニ剤を散布する。ただし、薬剤抵抗性の発達を避けるため、同一系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

(2) マシン油乳剤を7月以降に使用すると、果実腐敗を助長したり、糖度の低下を招いたりする場合がありますので使用しない。

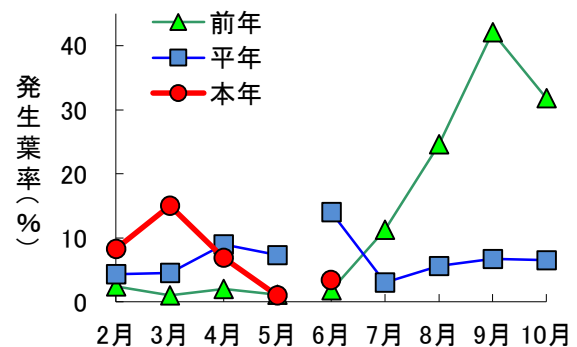


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

### 5. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 黄色粘着トラップ (図2 参照)

平年比：多 (+)

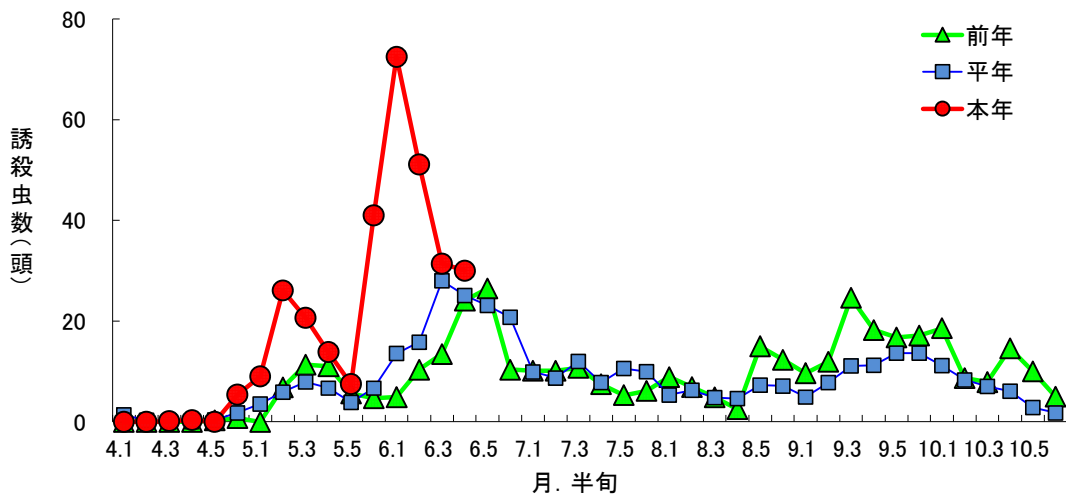


図1 黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺数の推移（小城市 果樹試験場調査）

- 1) R8年から、これまでとは別の調査地点のデータを使用した。
- 2) 平年値は令和元年、2年、4年～7年の6年間の平均。

(2) 7月の気象予報

気温及び降水量は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本虫の発生が多い地域では、7月中下旬頃に薬剤散布を徹底する。
- (2) イヌマキ、サンゴジュ等は本虫の発生源となるため、防風樹として植栽している園では特に発生に注意し、薬剤を散布する。

# ナシ

[【概要に戻る】](#)

定期調査（9圃場）  
調査日：6月16日

## 1. 黒星病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1、2参照）

発生葉率：0%（平年0.8%、前年0%）

平年比：やや少（-～±）

発生果率：0%（平年0.2%、前年0%）

平年比：やや少（-～±）

(2) 7月の気象予報

気温及び降水量は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病葉や発病果実は伝染源となるため、除去し処分する。
- (2) 6月下旬～7月上旬は果実への主要な感染時期であるため、DMI剤を用いた防除を必ず実施する。発生園、常発園または雨が続く場合には、DMI剤を追加散布する。

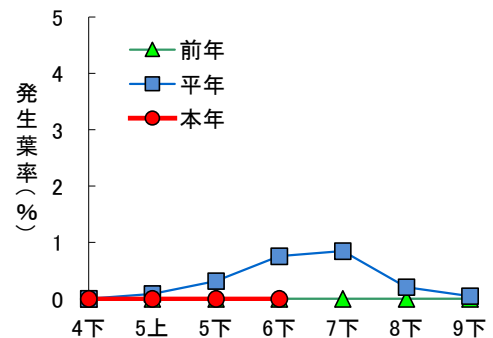


図1 ナシ黒星病（葉）の発生推移

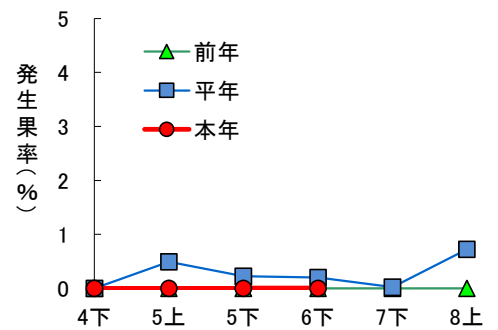


図2 ナシ黒星病（果実）の発生推移

## 2. ナシヒメシンクイ

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ① 県内に設置したフェロモントラップ (図1 参照)

平年比：やや多 (±~+)

#### (2) 7月の気象予報

気温は並で、並発生の条件 (±)

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 7月以降は世代が混在するため、7~10日間隔で薬剤散布を行う。

(2) 交信攪乱性フェロモン剤設置園においても、10~14日間隔で薬剤防除を行う。

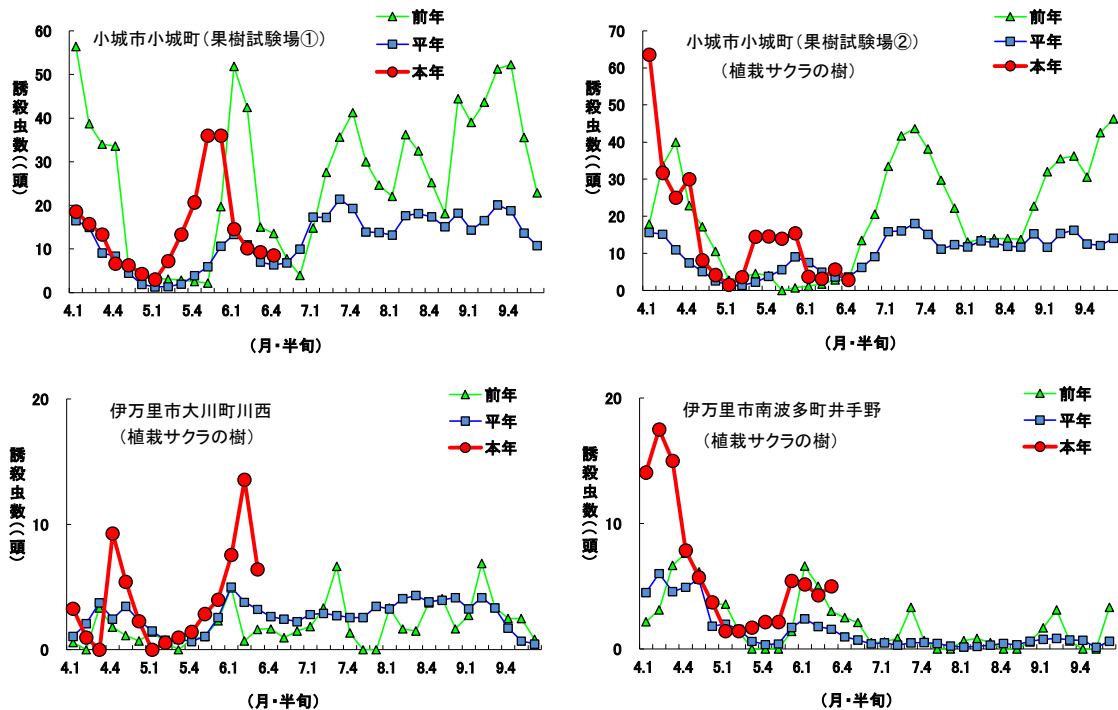


図1 フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺数の推移  
(果樹試験場、西松浦農業振興センター調査)

## 3. ハダニ類

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率：3.4% (平年1.9%、前年11.4%)

平年比：並 (±)

##### ② 施設栽培での発生状況：

多発園場が確認されている。(±~+)

#### (2) 7月の気象予報

気温及び降水量は並で、並発生の条件 (±)

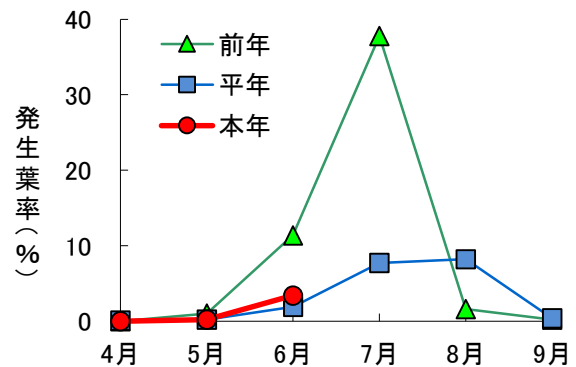


図1 ハダニ類のナシでの発生推移

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 一部圃場で多発生している。園内をよく観察し、低密度からの防除を徹底する。特に、園周縁部などスピードスプレイヤーによる散布で薬液がかかりにくい部分では、手散布を実施するなどして防除の徹底を図る。低密度時（寄生葉率 10%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5~1頭未満）からの防除を徹底する。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

## ブドウ

[【概要に戻る】](#)

定期調査（6圃場）

調査日：6月16~19日

## 1. ベと病

### 1) 予報の内容

発生量：平年並

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

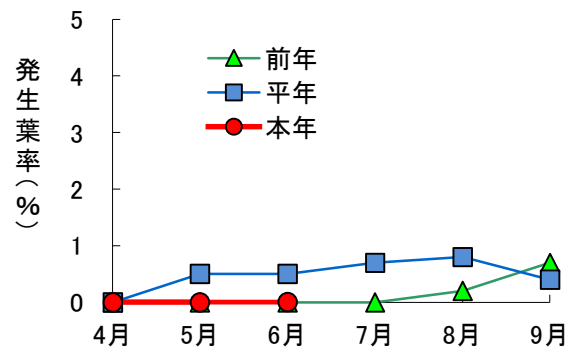
##### ①定期調査（図1参照）

発生葉率：1.0%（平年1.2%、前年0%）

平年比：並（±）

#### (2) 7月の気象予報

気温及び降水量は並で、並発生の条件（±）



### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) ベと病の罹病葉・果実は伝染源となるので必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する。
- (2) 降雨により感染が進展するため、降雨前の予防散布を徹底する。棚面の上にも薬剤が十分付着するように散布する。
- (3) ストロビルリン系殺菌剤（アミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル等）に対し耐性菌が発生しているため、本系統薬剤は本病の防除には使用しない。

## 2. チャノキイロアザミウマ

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ①黄色粘着トラップ（カンキツのチャノキイロアザミウマ（図1）参照）

平年比：多（+）

#### (2) 7月の気象予報

気温及び降水量は並で、並発生の条件（±）

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 6月中旬~7月中旬頃は主要な加害時期であるため、薬剤防除を徹底する。
- (2) シャインマスカットは、巨峰と比較して本虫の加害を受けやすい。そのため、シャインマスカット植栽園では、園内全樹（他品種を含む）を対象に袋掛け後も2~3回程度、薬剤散布を行う。

# 茶

[【概要に戻る】](#)

定期調査：6圃場

調査日：6月18日～6月19日

## 1. 炭疽病

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の実況

##### ① 定期調査 (図1参照)

発生葉数：5.5枚/m<sup>2</sup> (平年3.0枚、前年10.0枚)

平年比：やや多 (±～+)

#### (2) 7月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件 (±)

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病は雨滴により新芽に伝染するため、開葉初期の防除を徹底する。

(2) 三番茶を摘採しない圃場は、二番茶摘採後に浅刈り等を行い、発病葉を除去する。

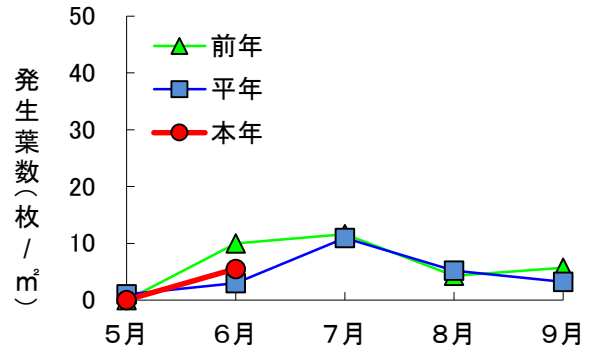


図1 炭疽病の発生葉数の推移

## 2. カンザワハダニ

### 1) 予報の内容

発生量：平年より多い

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の実況

##### ① 定期調査 (図1参照)

発生葉率：27.7% (平年6.4%、前年4.6%)

平年比：多 (+)

#### (2) 7月の気象予報

気温及び降水量は並で、並発生の条件 (±)

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤は年一回の使用とする。

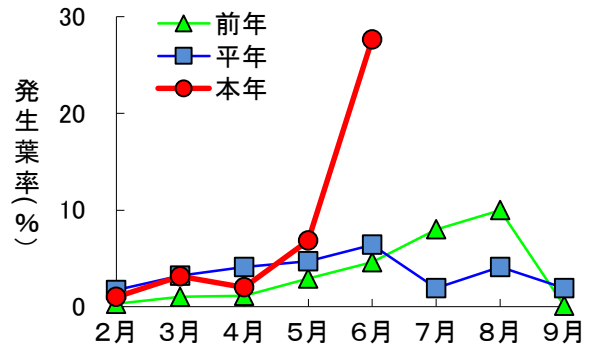


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

## 3. クワシロカイガラムシ

### 1) 予報の内容

発生量：平年並

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の実況

##### ① 定期調査

発生株率 (雄繭)：11.7% (平年26.6%、前年31.4%)

平年比：少 (-)

発生株率 (雌成虫)：6.7% (平年8.5%、前年25.0%) ※平年値はH30～R7の8か年平均

平年比：並 (±)

#### (2) 7月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件 (±)

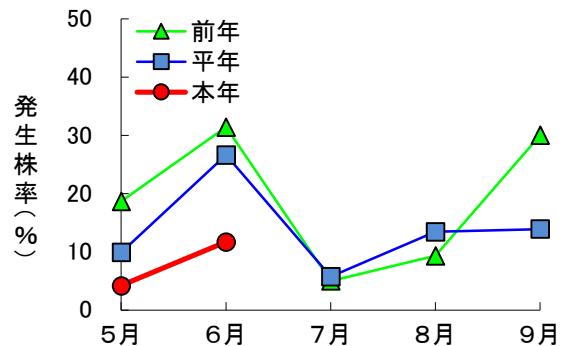


図1 クワシロカイガラムシ(雄繭)の茶での発生推移

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 薬剤による防除は、幼虫ふ化期に徹底する。
- (2) 防除の際は、枝全体に薬剤がかかるよう十分量をむらなく散布する。
- (3) 日本植物防疫協会の有効積算温度計算シミュレーションによると今年の第2世代防除適期は平坦部が7月中旬、山間部が7月下旬である。

## 4. チャノキイロアザミウマ

### 1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ① 定期調査 (図1 参照)

虫数：4.2頭/4ヶ所 (平年21.1頭、前年6.6頭)

平年比：やや少 (<-~±)

##### ② 吸引粘着トラップ (図2 参照)

平年比：多 (>+)

#### (2) 7月の気象予報

気温及び降水量は並で、並発生の条件 (<±)

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 萌芽期～開葉初期に防除を行い、多発生園ではその一週間後を目安に追加防除を行う。

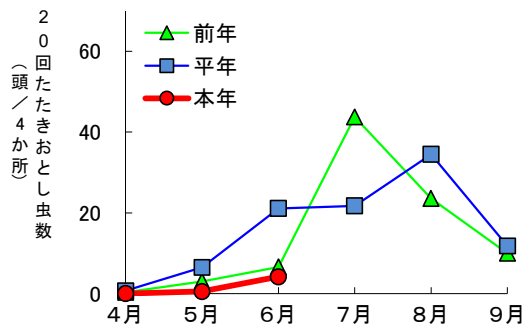


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

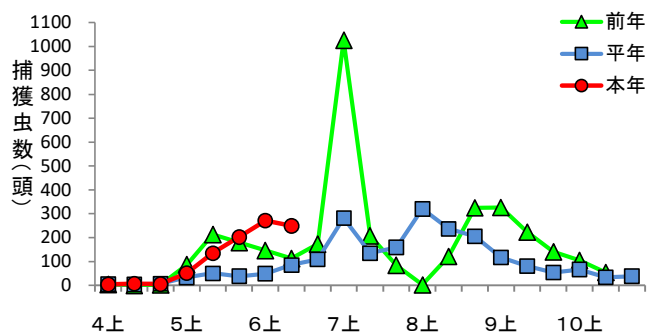


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

## 5. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容発生量：平年並

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ① 定期調査 (図1 参照)

虫数：3.3頭/4ヶ所 (平年4.9頭、前年1.6頭)

平年比：並 (<±)

#### (2) 7月の気象予報

気温は並で、並発生の条件 (<±)

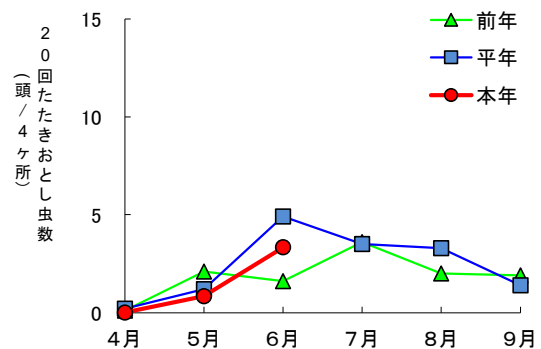


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

### 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 萌芽期～開葉初期に防除を行い、多発生園では、その一週間後を目安に追加防除を行う。

## 6. チャノホソガ

### 1) 予報の内容

発生量：平年より多い

### 2) 予報の根拠

#### (1) 発生の現況

##### ① 定期調査（図1 参照、）

被害葉数：21.7 枚/m<sup>2</sup>（平年 1.0 枚、前年 3.9 枚）

平年比：多（+）

##### ② フェロモントラップ（図2、3 参照）

平年比：並（±）

#### (2) 7月の気象予報

気温は並で、並発生の条件（±）

### 3) 防除上注意すべき事項

(1) 幼虫が葉裏に潜行する新葉展開期に、薬剤が十分かかるように散布する。

(2) 発蛾最盛期から1週間後が防除適期である。ただし、脱皮阻害剤の防除適期は発蛾最盛期である。

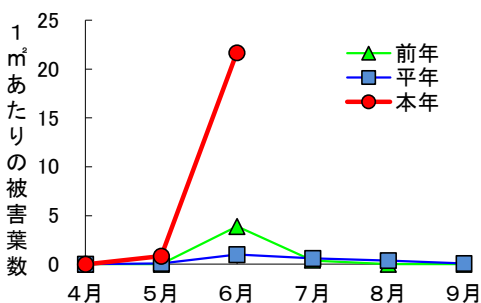


図1 チャノホソガの被害葉数の推移

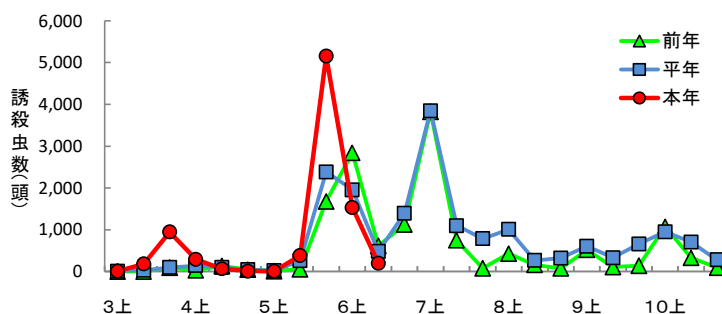


図2 フェロモントラップによるチャノホソガの旬別誘殺数の推移  
(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

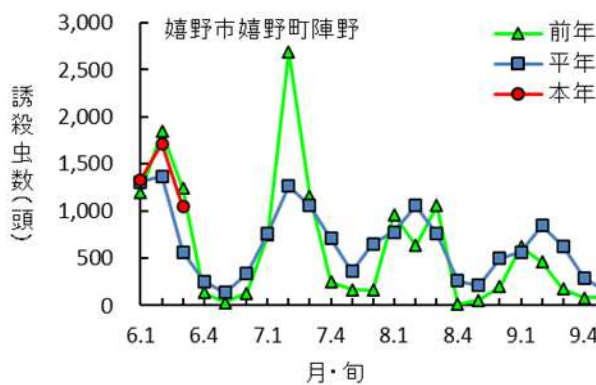
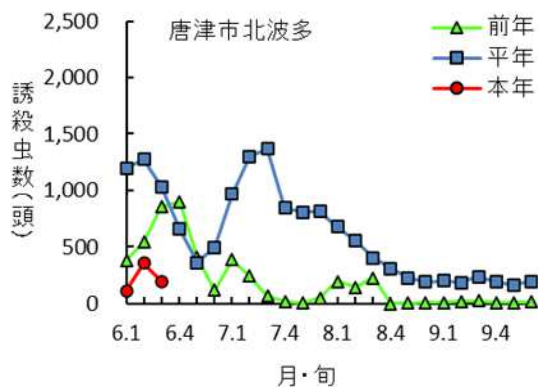


図3 フェロモントラップによるチャノホソガの半旬別誘殺数推移（唐津市・嬉野市、防除員調査）

※ 唐津市の平年値は、令和3年に設置場所等を変更したため、R3年以降の平均値。

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail [nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp](mailto:nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp)

ホームページアドレス [https://www.pref.saga.lg.jp/ki\\_ji00321899/index.html](https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321899/index.html)

